

競技大会の2日目(5月20日)に併せ、『隣接会場で、チェーンソーアートや薪割り、丸太引き、高性能林業機械の操作体験など、一般の方や子どもを対象としたイベントも開催しますので、ぜひお越しください』——そのイベントが「林業の魅力発信」だ。当日、モヤヒルズに近づくにつれ、バイクが走り回るようなエンジン音が高まってきた。

「全国の林業従事者がモヤヒルズを目指すようになれば」——2014年5月にモヤヒルズで開かれた第1回日本伐木チャンピオンシップで、総合3位に入賞した秋田貢氏(みづき)が、地元メデアのインタビュにそう応えていた。野球では甲子園を、サッカーでは国立競技場を目指すように、林業ではモヤヒルズを——。秋田氏の願いは現実のものとなりつつあるようだ。

総勢68人のうち、本県からは

4人が参加した。決勝では、24歳以上の「プロフェッショナルクラス」で、先崎倫正氏(しんまさ)が優勝。前田智広氏(あけひろ)が2位、秋田貢氏が3位と本県勢が独占、レベルの高さが際立った。

「林業の魅力発信」は、その決勝の日、競技会場に隣接する広場で行われた。伐木チャンピオンシップを盛り上げ、加えて、普段は人目につかない山中での林業という仕事をアピールしようと、公益社団法人あおもり農林業支援センター・県林政課が主催した。

熊の背中をわしづかみ丸太から動物削り出す

目より先に耳を引くのが、チェーンソーのあのエンジン音。見学に訪れた家族連れなどが、会場を震わす爆音に引かれてまず向かうのは、チェーンソーアートのブースだ。



チェーンソーの刃先だけで丸太から削り出すチェーンソーアート



熊の背中によって羽ばたく驚——まるで生きているかのような躍動感ある造形を、チェーンソーの刃先だけで丸太から削り出す芸術。熊をわしづかみにしたまま飛び立ちそうな迫力だ。また今にもいなくなきそうな馬もいれば、大きな目をぱちくりさせそうな



フクロウも。「青森カービングクラブ」所属のアーチストたちによる実演を、取り巻く人たちは感嘆の面持ちで見入っていた。その隣のブースで行われていたのは、チェーンソー製材。チェーンソーで板を作るのだ。台の上に横に置いた丸太に、

チェーンソーのバー(刃)を斜めに押し付け、専用の道具で同じ厚さを保ちながら、板を挽いていく。防護衣の前をオガ屑で白くして実演していたのは、林政課の男性職員。森の中に自動車を通れる道をつくるなど、現地でこうして製材するのだそうだ。横に伐

チェーンソーで板を作る“チェーンソー製材”

るだけでなく、縦にして板作りもできるとは、チェーンソーの用途は広い。これから何を作るのだろうか——その正面に人だかりができて始めた。高さ50cmほどの丸太の上に、小丸太を立ててある。高さ約30cm、直径10cm余りの小丸太を、下の丸太にビスで固定すると、ヘルメットの耳栓を装着し、チェーンソーのエンジンをかけたそのお顔——県林政課



輪切りにした丸太は鉢植えの台などに利用できる

の杉山徹課長であった。水平にしたバーが、小丸太に近づく。キーンと音がしてオガ屑が噴き出る。手元にチェーンソーを固定しながら、小丸太の周りをゆっくりと回る。小丸太よりもひとまわり小さな円を描いているのだ。一周し、厚さ1cmほど下のところを、真横にスパッと切る。地面に落ちた円盤状のものが作品である。「木のせんべい」なのだった。せんべいを切り取って

が始まった。地面に寝かせてあつた丸太を、両側から2人で「ガンタ」と呼ぶ道具で持ち上げて運ぶのだ。重さが400kg。長い柄の先に付いた金属の爪で丸太の頭を掴み、若者2人で持ち上げても、地面からちよつとしか離れない。後部に小型のタイヤが付いたその丸太を、歯を食いしばりな



グラップルという重機でアームを動かして操作する体験者

丸太の頭が地面をこすり出し、ついに背中が丸まり、ゴール。肩で息をする。『林業は力仕事』であることを実感させた。木を伐り倒す。玉切りする。切った丸太を一か所に集める。積んで山から出す——それらの作業が、格段に楽に、速くできるようになったのが高性能

がら運んでいくのだ。昔は林内で玉切りした丸太を山土場に集めるのに、トビやこのガンタを使って転がしたり雪の上を引いたりしたものらしい。スタートからゴールまで何秒かかるか。2組が参加してタイムを競う。スタート時にはゴールを力強く見据えていた若者の目も、運びながら徐々に下を向き、

林業機械のパワーである。会場で、実演されていた重機はグラップル。プロの操縦者が自分の手のようにアームを自在に動かしていた。体験希望者が運転席に乗り込んだものの、飛行機の操縦席に座ったようなものらしく、何をどうしていいか分からない表情。プロに教わって、どうにかアームは動いたが、右に行き過ぎ、左に行き過ぎ、くり返した末に、やつと丸太を正面の積み木の上に乗せることに成功。ご褒美に、プロが、機械の手で掴んだペットボトルを傾け、こぼれないようにコップにお茶を注いで、進呈した。見事な腕前に、「すごい」と子供たちから歓声が上がっていた。

安全な焼き付けづくり 「上向きの刃」が特許

頭に構えた斧を、目の前の丸太に振り下ろす。スパツと割



「キンドリングクラッカー」で焼き付けづくり



男の子の力でも簡単にバカッと割れる



テントの下で、せんべい汁を販売していた『林業女子@青森』



子供たちの人気を集めたポカールリング

危険なチェーンソーを扱うのだから「男の世界」と思いきや、チェーンソーアートのブースに、さつきはいなかった若い女性が一人加わって製作を始めていた。ピンクのヘルメットを被り、地面に片膝をつきながら削り出している動物は、クマさんだ。ヒグマではなく、縫いぐるみのようなクマさんというところがいかにも女性らしい。

一方、鮮やかなオレンジ色の防護衣をまとい、「枝払い」の体験に挑戦していたのも、県林政課の若い女子職員。枝払いは、伐木チャンピオンシップの競技の一つで、丸太から突き出る枝に見立てた丸棒を、いかに速く、正確に、安全に切り落とせるか、そのタイムを競うもの。指導したプロのチェーンソーウーマンの坪さん（十和田市）

が背後から見守る中、なかなかのチェンソーさばきを見せ、ゴールするとヘルメットの下から笑顔がのぞいていた。

テントの下で、「いい匂い」を発信していたのは『林業女子@青森』のブース。「せんべい汁、いかがですかー」と明るく呼びかける。

山の幸のサモダシ(ナラタケ)入りで、1杯200円。

木材の生産だけでなく、「食」においても人の暮らしと繋がっている森林・林業。女性ならではの視点で参加しよう——と県の女子職員10人で結成(2017年8月)した。せんべい汁が好評だったようで、イベントの日に6人も新たに会員になってくれたそうだ。

一方、子供たちの人気を集めたのは、ポカールリング。ポウリングとカールリングを合わせた名称で、ボールも、ストーンも木製だ。ポウリングは、緩い勾配の滑り台を木の球を転がし、カールリングは、底に滑車を付け

たストーンを滑らせる。それ一つと取っ手を手放したストーンが、ピンに命中したり、外れたり。子供に負けじとお婆さんも挑戦。やったあ! と拍手を贈ったのはお孫さんたちのようだった。

これが木で作ったものか——と驚かされたのが、バイクだ。女の子がまたがっている3輪のバイク。全部木で、後部のタイヤ(木の輪)を足で蹴るとちゃんと回るようにもなっている。一体、どうやって作ったのだろう。乗っている女の子の笑みが絶えなかった。木に触れると「いい笑顔」になるようだ。

木は、家にもなる。薪にもなる。間伐されずに荒れている森林を手入れし、健康な状態に維持管理して得られる恵みを享受するのは、人間なのである。

会場の全景を撮影しようとして、斜面を登り、高台からカメラを向けてみて、気が付いたことがあった。うつむいてスマホを見ている人が、1人もいなかった。



全て木で作られた驚きの3輪バイク。子供たちは木に触れると自然と笑顔になる